

序文

二十一世紀を目前にして、日本はもとより全世界は大きく変貌している。二十世紀末はノストラダムスをはじめとする各種の予言によつて、人類が滅亡するまで考えられてきた時期であつて、時の流れの大きな節目となつてきていることは、昨今の世界情勢を見れば誰にでもわかることである。筆者は、人類は滅亡しないという立場を二十年以上も前からとつてきているが、この世紀末が特別な時期であることを否定しているわけではなく、滅亡するはずだつたシナリオが変化したという考え方をしている。そしてその変化はなぜ起こり、それが何を意味しているかを説き明かそうとして、本書を一般向けに執筆したのであつた。

われわれ人間は、世界を動かしているのは人間そのものであると考えている。しかし、この地球上でのみ考えたとしても、人間以外の生き物は人間以上に多いことは間違いないし、地球を越えたら人間などはほとんど無能に近い。この世界には次元差があつて、物質三次元を越えた領域にも生命体が存在しているが、そこには人間よりもはるかに力のある生き物が存在していて、その力が地球世界を動かしているし、人間世界すらをも操っている。

そうしたことに関心を持たない一般の人々には、偶然としか映らない形で、現

実世界は異次元と対応しながら動いている。本書は、そうした動きを神々の世界とのかねあいでもとらえ直したものである。神界の動きと対比して地上人間世界をながめ直してみると、激動する世界の不可解な部分がいがい形で見えてくる。そして変容しているのは人間世界ばかりではなく、神々の世界からそれが始まっているのがわかってくる。神々の世界は雲の上の遠い世界ではなく、われわれの目の前の、すぐにも手の届く所にあることに驚かないではいられないだろう。

しかし、神々と人間との関係には非常に複雑なからみがあつて、それを正確に解き明かすことはなかなか難しい。過去人類はそうした異次元の領域を、宗教で説き明かそうと試みてきた。けれどもそれが十分に成功していないのは、各宗教間のミゾが非常に大きくて、とらえる神々や世界に相違があるからである。異次元とはそれほど複雑な世界であるということなのだが、各宗教が説いている世界にはそれぞれ次元差があつて、その違いを認識していないところに違和感や争いが起こる原因がある。過去それらの違いをわかりやすく説き明かした者はほとんどいなかった。本書はそうした領域にも認識の目を向けている。